

# 熊本城下・新町地区における勢屯の広場化の考察

久保 由美子

熊本市都市政策研究所 研究員

キーワード：近世期熊本、城下町、勢屯、広場

## 1.はじめに

### (1)背景・目的

わが国では近年、駅前広場の整備等、広場づくりが盛んである。広場は都市に賑わいと憩いをもたらす空間であり、中心市街地活性化の有効な手段となりうる。実際、全国でデザイン性に富んだ美しい広場が次々と誕生している<sup>1</sup>。しかし、単に空間設計や形態が優れているだけでは、真に活用される広場を創出することはできない。その地域の広場の空間の歴史、いわば広場文化を知ることも重要である。それは広場をはじめとする都市空間が、地域の社会や生活を反映したものであり、きわめて文化的なものとして捉えられるからである<sup>2</sup>。本研究はこのような意識に基づき、近世熊本城下町<sup>3</sup>の広場的空間「勢屯」について検討した。その歴史と特色から、現代における広場のあり方を探る上で有効な視座を得たいと考える。

### (2)日本の「広場」について

「広場」という言葉は、古くから日本語に存在した。慶長年間に編纂された『日葡辞書』は、「広い場所」「公の場所」「人の大勢いる場所」と説明している<sup>4</sup>。広場を「ゲシュタルト質〔広場として視覚的に認識できる形態、構造的特徴(筆者注)〕と市民の日常的な交歓の場としての社会的機能をもつ空間」<sup>5</sup>と、現代の「市民広場」のような意味で捉えるようになったのは、明治に入って西欧都市の広場が紹介されるようになって以降である<sup>6</sup>。

しかしながら、日本の都市に広場がなかったわけではない。日本では歴史的に、西欧のように明確な設計思想をもって何らかの活動を行うための広場を建設するかわりに、街路をはじめ、寺社の境内、橋詰や火除け地のようなオープン・スペースが広場として使用されてきた。日本の都市空間にはこのような「広場化」という文化があったとされ

る<sup>7</sup>。

既往研究は、形態性を備えた西欧の広場(「建築的広場」)に対して、こうした日本の広場を「場所的広場」と呼んでいる。日本独自の空間文化といえる場所的広場が成立するには、そこで行われる活動とその活動主体、かつその空間の使用が、保証されていることが必要であり、これら三つの条件がそろってはじめて、広場が成立するとされる(空間の広場化)。

このような日本の広場は、「広場化という主体的な行動を通して、宗教的・社会的・経済的・政治的コミュニケーションの節点として利用される人工のオープン・スペース」<sup>8</sup>と定義づけられている。日本の広場は空間の形態よりもむしろ広場化のプロセスが重要だった。そして広場化した空間は、そこでの活動が終了すると再び元の空地に戻っていく。つまり、日本の広場文化においては、人々が「なにを広場とするか」<sup>9</sup>、広場化された空間をどのように使いこなしていくかが重視されるのである。

### (3)勢屯の概要と研究の方法

「平山城肥後国熊本城廻絵図」<sup>10</sup>をはじめ、熊本城下町を描いた絵図には、城門や辻、構内外などの軍事的要所に通路を拡幅した勢屯(勢溜、武者溜の呼称・表記もある)と呼ばれる空地が複数確認できる。勢屯とは兵士が集まる場を意味し、各地の城郭、城下町にみられる。その形態は様々で、城の曲輪内や屋内に設けられることもあった。熊本では、加藤家による城下建設当時より複数設けられた。渡辺<sup>11</sup>は熊本城下の勢屯について、近世期に非軍事な用途に使用され、広場化した可能性があるとして指摘している。しかし、その実態について都市空間史的な観点から論じた研究は管見の限りみられない。

近世熊本については、細川家統治下における多数の一次

史料に加え、文献史学の分野での研究が蓄積されている<sup>12</sup>。本研究では、これらを用いて、細川時代の勢屯の態様を検討する。特に、5地点に計7箇所存在した新町地区の勢屯に注目し、街区構成(都市構造)、藩の政策(都市制度)と城下町における習俗(都市社会・文化)の三つの側面から、それらの利用実態について検討する。以下、まず2章において勢屯を含め新町地区の特徴について、3章で勢屯の使用実態について述べたのち、4章で勢屯の広場としての機能・特徴についてまとめる。

## 2.空間構造の分析

### (1) 新町地区の概要

熊本城の南西部に位置する新町は、加藤清正による城下町の建設当初は、武家地とされた地区(現熊本市中央区新町1丁目から4丁目まで)である。加藤家は慶長五年(1600)の関ヶ原の戦い後、54万石に加増されたのを機に、城下の範囲を拡大した。その際、武家地の一部が町人地に変更され、武家は地区の東西両端に居住するようになった。新しくできた町人地は新町、元からの町人地は古町と呼ばれるようになり、慶長十一年(1606)ごろ、古町と新町との間に坪井川が開削されてその区分が明確になった。

### (2) 勢屯の配置と街区構成

新町には構の外側にあるものも含め7箇所の勢屯があった(図1)。まず、二ノ丸に通じる門(新一丁目御門)の前に設けられた勢屯は、後述するようにここに高札場が設置されたことから①「札ノ辻」と呼ばれた。札ノ辻から町を時計回りに南下して、②塩屋町付近、更に③新町南端の中央にある古町につながる門(新三丁目御門)前、北上して新町東側に位置する④高麗門前、更に北上して新町の北西部にある構口の内側付近に⑤「一ノ勢屯」、⑥「二ノ勢屯」、構口外側に⑦「三ノ勢屯」と呼ばれる勢屯があった。なお本研究では、⑤、⑥、⑦の連続して位置する勢屯をひとつのブロックとし、地区全域5地点に勢屯があったとみなす。

勢屯は当初から町人地であった古町では町の入り口である長六橋前の1カ所にしか見られない。したがって勢屯は武家地の街区構成の特徴を示す、軍事的要素のひとつといえる。

もともと武家地であった新町では、こうした軍事的要素が町割変更後も残存した。南北に長い区画の道路はすべて見通しの利かないT字路(食い違い)であった。また武家地を

区画する「惣構え」として、坪井川のほか堀・土居・塀が地区の周囲を囲んでいた。さらに札ノ辻以外の4カ所の勢屯に隣接して、上級武士の武家屋敷(知行取屋敷)が配置され、監視と防衛、いざという場合の屯集場としての軍事的機能が加藤・細川の両治世期に渡って維持された<sup>14</sup>。

### (3) 街道の通過

新町の街区構成における、もうひとつの特徴は交通・物流の重要手段である街道の通過である。熊本では、加藤家時代、城下町に引き込む形で、豊前街道、豊後街道、薩摩街道、日向往還の四つの街道が整備された。これら四街道の起点とされたのが、町北部の城郭入り口にある新一丁目御門前の「札ノ辻」と呼ばれた勢屯であった。薩摩街道と日向往還は、札ノ辻から町南部の新三丁目御門前の勢屯を経て、新町を縦断する形で通っていた。また札ノ辻から城郭内部を直通して、豊前・豊後街道につながった。街区構成と勢屯の位置関係を視覚的にみると(図1参照)、新町を網目状にめぐる街路を貫くように街道が縦断し、勢屯が周辺地区との結節点となっていた。

街道は「本通り」と呼ばれ、参勤交代の行路となっていた。そして自藩のみならず、薩摩、相良など他藩からの往来があった。本通りはまた、熊本城下の公式の道とされ、他藩・他領の者は、熊本城下を通過する際、本通りを使うことが定められていた。

さて、改易された加藤家に替わり寛永九年(1632)に熊本に入った細川家は、一般の旅行者を対象に旅人間屋と呼ばれる宿を指定した。そして旅人間屋に宿泊や町案内をさせ、他方で旅人改めを義務付ける等、旅人の把握管理を行わせる制度を設けた。宿場制度の整備は、町の発展と同時に、不審者の侵入防止や他国からの商人や持ち込まれる商品の統制を目的としたものであった<sup>15</sup>。旅人間屋は、町に宿場町としての繁栄をもたらすと同時に、領外の者に対する監視活動を通じ、藩政の一端を担ったのである。

新町の本通り沿いには、他国の大名一行が宿泊する本陣(御客屋)をはじめ旅人間屋が数多く集中した。町屋は本通りを中心に町の沿道に配置され、経済活動の興隆が期待されるいっぽう、武家屋敷はこれらの背後に位置し、城下を防備していた。新町のこのような街区構成には、領国経済の繁栄とその保護、外敵への警戒という藩政の諸課題が反映されていたといえる。



- ①札の辻(新一丁目御門) ②塩屋町 ③新三丁目御門  
④高麗門 ⑤一ノ勢屯 ⑥二ノ勢屯 ⑦三ノ勢屯

図1. 新町の勢屯と街道

### 3.広場化の事例分析

#### (1) 高札場

幕藩体制が漸次安定し、城下での戦乱の可能性が低下すると、勢屯は軍事用途以外に使用されるようになった<sup>16</sup>。

まず高札場の設置である。高札場は幕府や領主の最も基本的な法令を書き記した木製の札（高札）を掲示した施設である。住民支配・情報伝達の手段として古くは奈良時代から存在したとされるが、近世期は江戸幕府が諸藩に領内各地への設置を義務付けたこともあり、高札が最も盛んに使用された時代だった<sup>17</sup>。また簡潔で理解しやすく書かれたので、読み書きの手本としての教育効果があった<sup>18</sup>。

熊本城下の高札場は「札ノ辻」の呼び名からも分かるように、新一丁目勢屯に設けられた<sup>19</sup>。これにより札ノ辻の勢屯は、交通のターミナルであると同時に、政治・社会の情報コミュニケーションの場としての機能を持つことになった。

#### (2) 市立て

藩運営に加え、幕府の命による普請や参勤交代のため、多額の費用を要する大名にとって、領国経済の繁栄は重要課題であった。そこで諸藩は「市立て」を奨励して「町中賑わい」（城下町の活性化）を図った。

新町では札ノ辻、新三丁目勢屯の2ヶ所で定期市が行われた。さらに、高麗門勢屯で湮梁会の市が開催された。熊本城下で市立てが開始された正確な時期と場所は不明であるが、細川家入国後の宝永二年(1705)の記録(『熊本藩町政史料一』)によると、5つの定期市を含め8つの定期・不定期市が確認できる<sup>20</sup>。つまり8ヶ所のうち3ヶ所が新町で開催されていたことになる。

人の往来や物資の流通が増大すると、城下町周辺の街道沿いには「出小屋」と呼ばれる常設の商品販売所が出来はじめた<sup>21</sup>。札ノ辻と新三丁目勢屯では、市に加えて出小屋が設置された。出小屋の存在は、領外の商人や在地農民が城下町内で通年営業するのを藩が許可したことを示している。このような状況から、支配体制の弛緩、都市と農村のせめぎあい、自由交易促進か領国経済保護かの政策対立の中を揺れ動く、近世社会の姿をみてとれる。

#### (3) 城下の中心として

新町は城下町の政治・経済の一翼を担う重要な地域であった。新町には特権的な地位にある商人が多数居住していた。彼らは町の顔役として、藩の町行政の一端を担った。塩屋町にあったとされる町奉行所<sup>22</sup>が廃止された後、町役人が詰める町会所が新町三丁目に設置された。諸産業の寄合場である惣会所も新町に所在した。また新町では、絹織物や小間物などの服飾品、武具を含む工芸品、そして書籍といった比較的奢侈な品が多く取引されていた<sup>23</sup>。これらは、武士や裕福な町人層、さらには街道を行きかう旅人の需要を見込んだものと思われる。塩屋町の勢屯の近くには船着場があり、物流も便利であった。こうした要因が重なり、勢屯の定期市・出小屋と町の商業を競合させつつ、新町は城下の中心繁華街的な性格を形成していった。

新町のこのような都心的性格と、複数の勢屯を配した町人地という空間的特徴は相関関係にあったと考えられる。南北を貫く街道をはじめとする街路と勢屯の配置構成は、新町での人の回遊と滞留をより効果的なものとしたであろう。同時に、本来は軍事的機能に特化した空間であった勢屯が、近世社会の政治的・経済的な変化の中、次第に身分・出自を問わず人が自然に集まる広場という性格を帯びるようになっていったのである。

#### (4) 公共空間、祭礼空間

また新町の勢屯は、商業空間としてのみならず、広場と

しての公共性も高めていった。飢饉の際、札の辻ではお布施所が設置された。また新三丁目勢屯では、有志の町人が乞食に施しを与えたとの記録が残る<sup>24</sup>。いずれも町人の主導による慈善活動であった。経済社会が進展した近世城下町の町人たちのなかには、篤志家たるに十分な財力を得た者もいたのであろう。彼らは藩の町支配体制の中に組み込まれながら、都市コミュニティの新たな担い手としての自覚や、ある種の市民性を習得していったと考えられる。新町の勢屯はそのような町人たちによって、都市の公共空間として利用されたのである。

さらに、地域の精神的基盤を支える役割をもった勢屯もあった。本来の機能そのもの呼び名とした「一ノ勢屯」、「二ノ勢屯」である。

藩が城下町の経済振興を狙い、市立てに加えて、各種祭礼行事を積極的に奨励<sup>25</sup>したため、新町の勢屯は、祭礼の場としても活用された。旧暦八月の七日から一五日の放生会まで開催される藤崎八幡宮<sup>26</sup>の祭りは城下町中が参加する大規模な行事であった。熊本の総鎮守である同社は明治以前、城郭に隣接し、新町の北部にあった。祭りの間、参道は参詣者で賑わい、茶店が立並んだ。放生会当日の神幸行列は祭りのクライマックスであり、藩主一族をはじめ多くの人々が見物した。一、二ノ勢屯は、放生会の神幸行列の通過点となり、棧敷が設けられた。ハレの日の勢屯は、藩お墨付きの町の中心広場となったのである。

今日なお熊本を代表する祭りである藤崎八幡宮例大祭の勇壮ぶりは、加藤時代に始まったとされる神幸の随兵行列によるところが大きい。両勢屯は、この祭りのときだけ、武者の集合場所という本来の姿に戻った。そして町民にとって、勢屯は「攻守の要」というイメージを抱かせる空間となった。宝暦年間頃、古町との間で歌われた懸合歌にある「新町に七つまである勢屯」<sup>27</sup>という詞から分かるように、「武者の町・熊本」の象徴として、勢屯は町の誇りとなっていったのである。

#### (5) 維持体制および時代の変容

以上のことから、支配者である藩側も勢屯の集客力や公共性を認識していたと考えられる。しかしながら、藩は勢屯に現代の都市市場に通じるような賑わいや憩いを常に求めていたわけではない。そもそも勢屯は、閉鎖性の強い上級武士の大屋敷の付近に配されており、これらの建造物や、以下に述べる藩の諸政策が、勢屯に沈黙と緊張感をもたら

す要因となったおそれを考慮しておきたい。

多数の人々が集まる場所は、その維持・管理の問題がつきまとう。当時の街路の管理は、沿道の住民の責任とされていた<sup>28</sup>。熊本城下の清掃に関しては、寛永一七（1640）年の藩主からの通達の形で制度化された。勢屯も街路の一部であるから、町民が人手と費用を負担した。実際のところ、勢屯では塵芥が散らかり相当汚かったようである<sup>29</sup>。札ノ辻をはじめ勢屯の清掃は特に重視された。この美観行政の背景には、「人が集まる場所が汚らしいのは見苦しい」という考え方があった<sup>30</sup>。また前述した勢屯での乞食への施しに対し、藩側は見物人が集まることを嫌っている。そして、参勤交代や藩主の「おなり」の際は、出小屋等の造作物の類は撤去しなければならず、勢屯での諸活動は中断した<sup>31</sup>。

加えて、内外の情勢が不安定化した幕末となると、勢屯付近では、番所による厳しい監視や見廻りなどが強化された。そして明治維新後、同10年(1877)の西南の役により、藤崎八幡宮社殿が消失、社地はその後の熊本鎮台用地となったため、同社は現在の井川潤町への移転を余儀なくされた。この結果、神幸行列の行路も変更され、一、二ノ勢屯は祭礼空間としての役割を終えることとなった。そして都市の近代化が進む中、新町の勢屯はそれぞれ建築用の敷地や道路の一部となって、次第に縮小し、空間そのものを失ってゆくのである。

#### 4.まとめ

以上、熊本城下・新町地区の勢屯の広場としての利用実態を明らかにしてきた。そこには本来広場でない空間が、何らかの活動が行われることにより「広場化」し、その活動が終了するとともに元の空地に戻っていく、日本の広場の特徴がみられた。そして集客力や市民性の醸成のような、現代広場に通ずる機能すら持っていた。同時に、勢屯で行われた活動は、清掃・監視活動など、支配者側の論理や政治情勢と無縁ではなかった。

ここでの検討内容をまとめると、

①新町は町人地に変更された後も、勢屯をはじめとする武家地の町割の特徴が残った。

②高札場の設置、街道の通過、有力商人の居住といった制度的・人的要因が重なることにより、新町は城下の中心市街地的な性格を形成した。

③その際、勢屯は市場等の催事場として活用され、町中に賑わいをもたらした。

④さらに勢屯は、慈善活動や祭礼行事に活用され、地域住民の交流・交歓の舞台として、町への誇りを育む役割も担った。

⑤他方で、勢屯は藩の規制により、その賑わいは限定された。加えて幕末の動乱と明治維新により、広場としての機能、そして空間としての実態を失っていった<sup>32</sup>。

## 5. むすびにかえて—今日的まちづくりへの示唆

近世熊本城下の「勢屯広場」の歴史からは、広場づくりの現代における意義が惹き出されよう。人々に活用される広場をつくる効用は、経済的側面だけに限られるものではない。広場は、人々が出会い、人々をつなげあうフィジカルな装置であり、地域へのアイデンティティを醸成していく機能すら持つ。新町の勢屯は、広場は地域の住民自身が育て、また住民を育てるものであること、真に活用される広場とはそうした「生きられる」空間であることをわれわれに教えてくれる。

いうまでもなく、本研究で検討した勢屯の歴史は、人口減少社会や少子高齢化問題といった現代社会が抱える喫緊の課題に即効策を示すものではない。しかし、行政側が子育てや移住の面で優遇策を施すことで、仮に都市の人口が増えるとしても、同時に必要なのは、生まれた子供たち、移住を選んだ人々がその後も同じまちに住みつづけることを選択するような持続可能性のあるまちづくりではないだろうか。そのような中・長期的観点からみた施策のひとつとして、地域の広場文化を育み、そして根付いてゆくような広場づくりを提案していきたい。

### 補遺 勢屯の広場的意匠・機能の分析

かつて都市空間のイメージを構成しつつも、すでに失われた歴史的意匠の継承方法として、掲示板等でその場所に記録する等の方法が考えられる。新町の勢屯についても同様のことがいえよう。そこで『市史』の記述や絵図を基に、広場的景観を構成する要素を読み取り、付表にまとめた。共通する要素は、各勢屯に共通するイメージを構成し、「その他」に分類される要素は、各勢屯独自のイメージを構成するものとなる。今後の歴史的市街地区の景観整備に向けた有効な基礎資料となることを期待したい<sup>33</sup>。

### ○ おもな参考文献

#### 書籍

1. 小野寺康 小林正美 南雲勝志(2015)『市民が関わるパブリックスペースのデザイン：姫路市における市民・行政・専門家の創造的連携』エクスナレッジ
2. 隈研吾 鈴木知之 陣内秀信(2015)『広場 = Hiroba : all about "public spaces" in Japan』淡交社
3. 小野寺康(2014)『広場のデザイン：「にぎわい」の都市設計5原則』彰国社
4. 山下裕子(2013)『にぎわいの場富山グランドプラザ：稼働率100%の公共空間のつくり方』学芸出版
5. 松崎範子(2012)『近世城下町の運営と町人』清文堂出版
6. 本田秀人(2010)『近世都市熊本の社会』熊本出版文化会館
7. 鳴海邦碩(2009)『都市の自由空間：街路から広がるまちづくり』学芸出版社
8. 都市デザイン研究体(2009)『日本の広場復刻版』彰国社
9. 新熊本市史編纂委員会(2001)『新熊本市史 通史編 第3巻 近世I』熊本市
10. 朝日新聞社[編](2001)『朝日百科 国宝と歴史の旅 上』朝日新聞社
11. 新熊本市史編纂委員会(1996)『新熊本市史 別編 第2巻 民俗・文化財』熊本市
12. 新熊本市史編纂委員会(1993)『新熊本市史 別編 第1巻 絵図・地図 上 中世・近世』熊本市
13. 三浦金作(1993)『広場の空間構成：イタリアと日本の比較を通して』鹿島出版会
14. 樋口忠彦(1993)『日本の景観：ふるさとの原型』筑摩書房

#### 論文

1. 妻木宣嗣 曾我友良 橋本孝成(2009)「17世紀、萩の武家居住地域における街路空間に関する研究」『日本建築学会計画系論文集』Vol. 74 No. 642 pp. 1831-1837
2. 西成典久 齋藤潮 (2004)「石川栄耀の広場設計思想：新宿コマ劇前広場をめぐって」『都市計画論文集』No.39-3 pp.907-912
3. 松崎範子(2000)「熊本藩における旅人間屋の整備と城下商人の商業経営について」『市史研究くまもと』No.11 pp. 21-47
4. 中林 雅二 西山 徳明 (1998)「歴史的市街地における

景観特性の把握に関する研究：熊本市旧市街地 古町・新町地区を事例として『日本建築学会研究報告九州支部』 No. 37 pp.165-168

5. 伊東孝(1986)「絵地図にみる橋詰広場施設と景観の移り変り」『日本土木史研究発表会論文集』 Vol.6 pp.198-207
6. 渡辺達三(1972)「近世広場の諸形態」『造園雑誌』 Vol. 35 No.3 pp.1-7
7. 小林清治(1957)「いわゆる「城下町」の構造」『福島大学学芸学部論集』 Vol.8 No.1 pp.26-37

#### 資料・報告ほか

1. 熊本市 (1989)『歴史廻廊都市くまもとフィールドミュージアム熊本城下町の提案一』熊本市

(新)新町に七つまである勢屯

(古)長六河原、相撲、櫓(『市史』(1996) p.440より抜粋)。

坪井川一筋を境にした新町と古町は、お互いに相手のことを「橋の向うの新町と古町段下り」と言いあい、色々なことで張合ったという(同書 p.439)。  
28 鳴海(2009) p.71。

29 一例として、塩屋町・高麗門両勢屯について、清掃日は月に2回で、16日に6人、25日に6人出勤していたが、元禄一六年(1703)年に新たな通達があり、以後は8人増員し1か月に10回2人ずつ出勤して掃除する体制になったとの記録がある。

30 『市史』647f 幕藩体制期の街路管理について、妻木ら(2009)は、萩藩の例を挙げ「街路の整然性は諸権力の表出」と考えられているのではないかと指摘している。

31 新三丁目勢屯にあった出小屋は、寛政三年(1792)には撤去された。

32 新町の勢屯は、往時のスケールは失われたものの、江戸時代の広場として、現在も地域住民の記憶に受け継がれている。住民と隣接大学の協働によるまちづくりアート・プロジェクトで、勢屯に集る武者の絵が隣接する店舗のシャッターに描かれるなど、地区の原風景を彷彿とさせるモチーフの一つとなっている。

33 新町および古町地区に継承される歴史的景観に関する既往研究として、中林・西山(1998)がある。

1 国内外の広場やその活用事例を紹介した著作として、小野寺[ほか](2015)、隈[ほか](2015)、小野寺(2014)、山下(2014)等がある。

2 鳴海(2009) p.3

3 近世当時、「町」とは町人地のことを指し、「城下町」の用語は使用されず、城郭の周囲に広がる都市全体を表現する場合は「城下」と呼んだとされるが[小林(1957) p.2]、本稿では、便宜上「城下町」を使用する。

4 伊東(1986) p.199

5 西成・斎藤(2004) p.907

6 鳴海(2009) p.138

7 以下の記述は、隈[ほか](2015)、都市デザイン研究体(2009)、三浦(1993)に基づいている。

8 三浦(1993) p.136

9 小野寺(2014)、p.221(篠原修によるコメントから引用)。

10 新熊本市史編纂委員会 [以下『市史』(1993) p.25

11 渡辺(1972) p.6

12 近世熊本城下における行財政と町人との関係を論じた研究書として、松崎(2012)と本田(2010)がある。

13 『市史』(2001) p.241

14 この配置構造は、南部の古町の入り口や、北部の京町の入り口の勢屯でも同様である。

15 松崎(2000) p.27

16 江戸時代を通じて実施された参勤交代は形式上「軍役」であり、随行の武士の「供前え」は、勢屯が「例外的」に軍事用途に利用されたともいえる。

17 竹原 万雄「高札研究をめぐる現状と課題：付・明治大学博物館刑事部門所蔵高札目録」『明治大学博物館研究報告』(2007) vol.12 pp.124.

18 『市史』(2001) p.664

19 城郭内では、東側の十八間櫓下に高札場があった。

20 『市史』(2001) p.649

21 同書 p.663

22 正確な場所は不明である。

23 『市史』(2001) pp.730-731 表21

24 同書 p.649.

25 肥後藩では加藤氏時代より細川氏時代を通して、奉祝御上と町中賑わいを狙いとする盆後踊(盆踊り)が創設されたと考えられている(本田(2010) p.125)。

26 旧藤崎八幡宮は熊本城西、三ノ丸、現在の藤崎台野球場付近にあった。

27 "(新)初市をたてて美々しき一丁目

(古)閏月でもたつ朝市

(新)擬宝珠をたてたる橋は三丁目

(古)土橋ながらも長い長六橋

(新)新町に二人まである能太夫

(古)二度の翁は祇園会にあり

付表:勢屯の広場的意匠・機能の分析

		①札の辻 (新一丁目御門)	②塩屋町	③新三丁目御門	④高麗門	⑤一ノ勢屯、 ⑥二ノ勢屯
空間の概念図						
空間を構成する要素※設備・装置、店舗など	番所	○	○	○	○	○
	井戸	○		○	○	
	出小屋	○		○		
	その他	高札場				棧敷 (*1)
空間の使用形態※滞留を促しうるイベント	定期市	○		○	○	○
	住民による清掃	○	○	○	○	○
	祭礼行事			○	○	○
	慈善活動	○		○		
隣接する施設・空間	知行取屋敷		○	○ (*2)	○	○
	櫓門	○		○	○	
	街道	○		○		
	橋		○	○		
その他		船着場 町奉行所	町会所		広場の連続配置	
空間の使用行動の性格	流通・消費行動	○	○	○	○	○
	空間維持・管理	○	○	○	○	○
	観光・レクリエーション	○		○	○	○
	政治的コミュニケーション	○	○	○		
	日常生活 (水汲み、洗濯等)	○		○		
	情報伝達	○				
	教育	○				
現在の状況	新町一丁目 子供文化会館敷地	新町二丁目 熊本中央郵便局敷地の一角	新町二・四丁目 明八橋前交差点	新町四丁目 JR鹿児島本線と県道237号線の交差点	新町三丁目 個人商店等が立地	

\*1祭事期間のみ

\*2のち榎方屋敷(蝸蝸工場)に変更

出典:

塩屋町、新三丁目御門 一ノ勢屯・二ノ勢屯: 高麗門塩屋町之絵図 文化八年(1812)~文政七年(1824) (推定) (新熊本市史 別編第一巻 p.153)

札の辻(新一丁目御門)、高麗門: 新町絵図 宝暦十二年(1762)~寛政三年(1792) (推定) (同書 p.184)